

旭ろうさい病院ニュース

病院情報誌 第170号

令和3年10月1日発行

発行所: 旭ろうさい病院

〒488-8585

尾張市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

手術をしない脳神経外科

脳神経外科部長 丹羽 裕史



病床数250床の当院に脳神経外科が開設されたのは2007年でした。詳細は存じませんが、数年前で脳外科医が退職されました。その後、長きにわたり、非常勤医による週2回午前中の外来のみ診療して参りました。

2017年2月に小生が常勤の脳外科医として一人で赴任させていただきました。一人で救急対応ができるのか、手術には応援を呼べるのかなど考えますと、通常脳外科診療は困難と考えました。救急の幅がかなり縮小しますが、比較的軽傷の症例を治療する、手術症例はしかるべき手術対応施設に治療をお願いする、という方針で赴任いたしました。

毎日の外来は5-10人程度。新患は0-3人程度。入院は年間20名、手術あるいは重症管理目的での他院への紹介（転院搬送）が年間20例ほどとなっています。

外来での縫合創処理は1か月に2-3例、縫合を伴わない創傷処置はもう少し少ない印象です。

表1に2020年1年間の入院患者数を示します。脳出血は目撃があつて倒れたような超急性期の症例はありません。老健施設などでここ2-3日様子がおかしいとか、食事がとれないといった症状の精査で診断された症例です。経過と画像から、保存的治療が妥当と考えられた症例に限っています。

表1

	名
脳出血	5
脳虚血	8
外傷	4
脊椎	2
腫瘍	1

虚血は神経内科的症例も含まれていますが、一部には虚血の原因として頸部内頸動脈狭窄症を診断しており、急性期の保存治療ののちに、頸動脈内膜剥離術や頸動脈ステント留置術の適応がありそうな症例が含まれています。外傷は発症から半日を超えていると思われる頭蓋内出血で、緊急手術に至る可能性が低いと判断した症例です。脊椎は89歳の歯突起骨折の症例です。高齢とはいえ、固定術を行わなければ呼吸停止の可能性があると診断し、一度は手術目的で転院搬送しましたが結果的に年齢などの条件のため、手術を見合わせた症例です。当院に収容して、頸椎カラー（フィラデルフィア）固定で療養し、介護施設と調整して、施設へ退院されました。

表 2 は手術目的、ないし緊急手術待機のため、転院搬送とした症例です。紹介後に報告をいただかず、経過不明となっている欄があります。歯突起骨折以外では多くの症例で手術を施行いただいております、トリアージの役割が果たしているかと、安堵する次第です。経過を教えていただけないのは、信用いただけていないのかと反省するところです。2 段目の硬膜動静脈瘻は少し耳慣れない病名でしょうか。小生 20 年の脳外科経験で 2 例しか遭遇しなかった病気です。見落とした数はもちろん不明です。なぜかこの年、3 例も遭遇しました。3 例とも海綿静脈洞部のものでした。硬膜動脈から海綿静脈洞に異常な血流が生じ、静脈洞の圧が上昇し、ここへ流入する眼静脈が怒張し、眼瞼結膜に充血を来し、海綿静脈洞を通る動眼神経や外転神経に機能低下を起こして眼球運動障害を発症（患者の訴えは複視となります）したり、さらには脳表静脈へと血流が逆流すれば、脳うっ血、ひいては脳出血をきたすこともある疾患です。当科では頭部 MRI、MRA にて疑い症例と診断して、高次の脳神経外科施設へ紹介しました。脳血管撮影にて診断いただき、主にカテーテルによる経静脈的塞栓術で治療いただきました。

以上、手術をしない脳外科の活動をご報告いたしました。

手術適応がなさそうで、大病院の脳神経外科への紹介をためらうような症例こそ、当科がお役に立てるのではないかと考えております。

お気軽にご利用いただけましたら幸いに存じます。

表 2

	紹介数	手術症例
慢性硬膜下血腫	4	3
硬膜動静脈瘻	4	3
脳出血	1	不明
外傷	2	1
頸部内頸動脈狭窄症	1	1
破裂脳動脈瘤	1	1
未破裂脳動脈瘤	2	不明
膠芽腫	2	2
歯突起骨折	1	0
脳膿瘍	1	1
聴神経腫瘍（疑い）	1	不明
髄膜腫（疑い）	1	不明
下垂体腺腫（疑い）	1	不明

新病院3年目の地域医療連携室

地域医療連携室看護師・感染管理認定看護師 青山由紀子

10年間旭労災病院院内感染管理者であった私は、令和3年4月より地域医療連携室に異動となりました。すべてが初めてのことで、同じ病院内でも全く別の世界かと思うほどでした。地域医療連携室は、今から25年前に病診連携室として立ち上げ、新病院開院後、名称を「地域医療連携室」へ変更しました。10月1日、現在の登録医院は222医院となっております。登録医の皆様、日頃からご協力いただき感謝申し上げます。

当院の地域医療連携室のメンバーを紹介します。メンバーは頼りになる女性事務員3名と男性事務員1名（元放射線技師：半日）と看護師2名の計6名です。



マスクを外した地域医療連携室のメンバーと最高の笑顔で撮影 左端が筆者です

地域医療連携室の業務内容は、一言で言うと、「何でも屋さん」です。患者さんからは場所柄、インフォメーションとしてよく場所を聞かれますし、問い合わせの電話、相談を受けることも多々あります。地域医療連携室での主な仕事は、クリニック・医院からの診察、検査予約の電話対応、紹介患者関連の様々な書類の管理、当日診療科の受付及び診療科までの案内です。

当日受診の場合は状態の悪い患者も多く、外来への引継ぎは、看護師としての判断が必要なケースもあります。日によっては、戦場の如く、電話にすぐ対応できないほど、忙しくなる日もあります。

今年は特に新型コロナウイルス感染症のトリアージが重要で、クリニック・医院からの当日受診の場合は、緊急性があるか、発熱があるかなどを確認し、来院時間の調整や来院方法など細かく対応しています。

また、他病院の受診予約、転入院の対応、当院から他病院への転院の窓口も担っています。

今年6月からは、近隣病院、クリニックへの病院訪問も再開しています。院長、副院長をはじめ、医師、各医療職部長、新人の私も同乗し、25箇所訪問させていただきました。電話での

数分の対話だけではお伝えできないことをコロナ禍ではありますが、直接訪問させていただくことでお互いの連携をスムーズにするヒントをいただき手応えを感じています。

今後も頼りになる身近な総合病院となれるよう、ご意見を伺うために積極的に病院訪問活動に力を入れていきたいと思ひます。

その他の活動として、当院の登録医の先生方を対象とした、当院医師による研修会及び臨床のディスカッションの場としての旭臨床懇談会を毎月開催しております。現在、直接お越しいただくことが難しいこともありますが、今後は第6波を踏まえ、ZOOMなどの活用も検討する必要性も感じています。そのほかに医師会との協賛の研修会も実施し、地域の先生方と学びの機会となるような活動も実施しています。

地域医療支援病院として認定され、地域の基幹病院としての役割を果たすための協議会としては、地域医療支援・病診連携システム運営協議会（年4回）を開催しております。また、『千成会』（年1回・瀬戸旭医師会）、『守山区顔の見える医療連携の会』（年1回・守山区医師会）を開催し、地域の医療機関の先生方との連携強化のための親睦を目的に活動をしています。

最後になりますが、2ヶ月に1回発行する病院ニュースの広報誌作成、発行を担当しています。ニュースに取り上げてほしい内容などもご意見をいただければと思ひます。

今回の異動では、私は3月まではコロナ対応を中心に行っていたので、発熱の紹介患者の対応や地域医療連携室での感染対策について少しはお役に立つことができていると感じています。まだまだ、わからないことばかりですが、電話対応でご迷惑をおかけしないよう頑張っていきます。感染管理認定看護師としても地域の皆さんのお手伝いができることを考え、頼りにされる地域医療連携室の一員になりたいと思ひます。

お願い

受診される患者さんにお伝えください。

緊急事態宣言解除後も基本的な感染対策の継続が必須です。

受診の際には、適切なマスク装着を推奨しております。

一番飛沫が広がりにくいのは、不織布マスクで飛沫の約8割を押さえられると言われています。また、マスクを正しく装着すること、マスクのサイズが顔に合っていることが重要です。

マスクを外しての日常生活が戻る日まで、一緒に頑張りましょう。

私たち地域医療連携室は、この地域の医療・介護・福祉・行政との関係を大切に、連携を円滑にすることで、市民の皆様の健康に貢献したいと考えております。



医師異動のお知らせ



新任医師

専攻医	ふじよし 藤 吉	かずま 一 馬	平成 28 年 3 月	愛媛大学医学部医学科卒業
専攻医	さいとう 齋 藤	まなみ 愛 美	平成 29 年 3 月	金沢医科大学医学部医学科卒業
専攻医	たけうち 竹 内	りょうや 了 哉	平成 31 年 3 月	名古屋市立大学医学部卒業

令和 3 年 10 月 1 日付

退任医師

糖尿病・内分泌内科医師	中林 廉太
整形外科医師	橋本 康平
専攻医	木村 理沙
専攻医	中井 俊介
専攻医	藤井 藍
専攻医	向井 彩

令和 3 年 9 月 30 日付